新・家康公検定

わがふるさとは、三河

～ 家康公と家臣団ゆかりの地 ～

「新・家康公検定」2018

副読本

編 集 / おかざき塾　発 行 / 公益財団法人徳川記念財団・岡崎商工会議所

2018年度

新・家康公検定

わがふるさとは、三河

はじめに

「新・家康公検定」がはじまります。

徳川家康公を顕彰（けんしょう）し、学び、深く歴史の声に耳を傾け、広く現代社会のうねりを見つめ、これからの社会のあるべき道を構想する機会として、多くの有意のみなさまとともに考え、この「新・家康公検定」を実施いたします。

テーマは、「わがふるさとは、三河」。

ふるさとの根っこの地、岡崎から、三河から、その使命をもって徳川記念財団様とともに、この国の成り立ちと特質を学びながらこれからの時代を構想してゆきます。

日本のため、世界のための大切な事業となります。

目　次

—はじめに—　・・・・・・・・・1

・三河出身の藩と日本地図　・・・・・・・・・4
・三河ゆかりの町、一覧表　・・・・・・・・・6
・家康公を取り巻く家系図と主な三河家臣団　・・12

Ⅰ．三河風土
①　三河の自然と風土　・・・・・・・・・14
②　古代国家「三河国」　・・・・・・・・・15
③　三河仏教の展開　・・・・・・・・・16
・民衆の念仏と武士たちの雄叫びの中から——　17

Ⅱ．三河武士の源流
①　源頼朝と瀧山寺　・・・・・・・・・・18
②　足利一門の三河進出　・・・・・・・・・19
③　矢作川流域　・・・・・・・・・・・20
④　三河守護　・・・・・・・・・・・・・22

Ⅲ．松平の系譜
①　松平初代親氏　・・・・・・・・・・・24
②　松平三代信光　・・・・・・・・・・・25
③　松平四代親忠　・・・・・・・・・・・26
④　松平七代清康　・・・・・・・・・・・27

Ⅳ．家康公生誕前夜

この時代―動乱、下克上、そして新秩序を求めて　28

Ⅴ．家康公の生涯

①　生誕の時代　・・・・・・・・・・30
②　自立の時代　・・・・・・・・・・32
③　隆盛と試練の時代　・・・・・・・・・36
④　関東移封　・・・・・・・・・・40
⑤　江戸幕府を開く　・・・・・・・・・46
⑥　元和偃武　・・・・・・・・・・50
・日本の礎を整えて――　・・・・・・・・・52

Ⅵ．泰平、江戸時代

①　伊奈忠次・・治水、新田開発事業・・54
②　大岡忠相・・江戸町奉行・・・・・・56
③　大給恒・・・江戸から明治へ・・・・58

―おわりに―　・・・・・・・・・60

・年表　家康公の生涯

三河出身の藩と日本地図

三河出身の家臣たちが幕末時に藩主を務めた主なゆかりのまち（親藩を含む）

幕末に存在した全国の約２８０の藩のなかで、
全体の約４０％強にあたる約１２０の藩は、
家康公に仕え家康公の偉業をたすけた三河武士たちの末裔（子孫）が
藩主（大名）になっています。
彼らは全国の１００を超える市町を治め、天下泰平の江戸時代を
つくってきました。

「わがふるさとは、三河」

地図上の番号の詳細は
「三河ゆかりのまち一覧表」（P6～P11）をご参照下さい。

三河ゆかりのまち一覧表（幕末時）①

No	旧国名	藩名	藩主家	現在の地名	地図番号
1	出羽	松山藩	**酒井家**	山形県　酒田市	1
2	出羽	庄内藩	**酒井家**	山形県　鶴岡市	2
3	出羽	長瀞藩	**米津家**	山形県　東根市	3
4	出羽	山形藩	**水野家**	山形県　山形市	4
5	出羽	上山藩	**藤井松平家**	山形県　上山市	5
6	陸奥	福島藩	**板倉家**	福島県　福島市	6
7	陸奥	会津藩	**会津松平家**	福島県　会津若松市	7
8	陸奥	守山藩	**松平（水戸）家**	福島県　郡山市	8
9	陸奥	磐城平藩	**安藤家**	福島県　いわき市	9
10	陸奥	湯長谷藩	**内藤家**	福島県　いわき市	9
11	陸奥	泉藩	**本多家**	福島県　いわき市	9
12	陸奥	棚倉藩	**阿部家**	福島県　東白川郡棚倉町	10
13	越後	村上藩	**内藤家**	新潟県　村上市	11
14	越後	三根山藩	**牧野家**	新潟県　新潟市	12
15	越後	与板藩	**井伊家**	新潟県　長岡市	13
16	越後	長岡藩	**牧野家**	新潟県　長岡市	13
17	越後	高田藩	**榊原家**	新潟県　上越市	14
18	越後	糸魚川藩	**越前松平家**	新潟県　糸魚川市	15
19	下野	高徳藩	**戸田家**	栃木県　日光市	16
20	下野	烏山藩	**大久保家**	栃木県　那須烏山市	17

三河ゆかりのまち一覧表（幕末時）②

No	旧国名	藩名	藩主家	現在の地名		地図番号
21	下野	宇都宮藩	**戸田家**	栃木県	宇都宮市	18
22	下野	壬生藩	**鳥居家**	栃木県	下都賀郡壬生町	19
23	下野	足利藩	**戸田家**	栃木県	足利市	20
24	上野	伊勢崎藩	**酒井家**	群馬県	伊勢崎市	21
25	上野	前橋藩	**越前松平家**	群馬県	前橋市	22
26	上野	高崎藩	**大河内松平家**	群馬県	高崎市	23
27	上野	安中藩	**板倉家**	群馬県	安中市	24
28	上野	小幡藩	**奥平松平家**	群馬県	甘楽郡甘楽町	25
29	常陸	水戸藩	**徳川家**	茨城県	水戸市	26
30	常陸	笠間藩	**牧野家**	茨城県	笠間市	27
31	常陸	宍戸藩	**松平（水戸）家**	茨城県	笠間市	27
32	常陸	府中藩	**松平（水戸）家**	茨城県	石岡市	28
33	常陸	下館藩	**石川家**	茨城県	筑西市	29
34	常陸	下妻藩	**井上家**	茨城県	下妻市	30
35	下総	結城藩	**水野家**	茨城県	結城市	31
36	下総	古河藩	**土井家**	茨城県	古河市	32
37	下総	関宿藩	**久世家**	千葉県	野田市	33
38	下総	高岡藩	**井上家**	千葉県	成田市	34
39	下総	多古藩	**久松松平家**	千葉県	香取郡多古町	35
40	上総	一宮藩	**加納家**	千葉県	長生郡一宮町	36

三河ゆかりのまち一覧表（幕末時）③

No	旧国名	藩名	藩主家	現在の地名	地図番号
41	上総	大多喜藩	**大河内松平家**	千葉県　夷隅郡大多喜町	37
42	上総	鶴牧藩	**水野家**	千葉県　市原市	38
43	上総	請西藩	**林家**	千葉県　木更津市	39
44	上総	佐貫藩	**阿部家**	千葉県　富津市	40
45	安房	勝山藩	**酒井家**	千葉県　安房郡鋸南町	41
46	武蔵	岩槻藩	**大岡家**	埼玉県　さいたま市	42
47	武蔵	川越藩	**松井松平家**	埼玉県　川越市	43
48	武蔵	忍藩	**奥平松平家**	埼玉県　行田市	44
49	武蔵	江戸	**徳川将軍家**	東京都　千代田区	45
50	相模	荻野山中藩	**大久保家**	神奈川県厚木市	46
51	相模	小田原藩	**大久保家**	神奈川県小田原市	47
52	信濃	飯山藩	**本多家**	長野県　飯山市	48
53	信濃	上田藩	**藤井松平家**	長野県　上田市	49
54	信濃	小諸藩	**牧野家**	長野県　小諸市	50
55	信濃	岩村田藩	**内藤家**	長野県　佐久市	51
56	信濃	田野口藩	**大給松平家**	長野県　佐久市	51
57	信濃	松本藩	**戸田家**	長野県　松本市	52
58	信濃	高遠藩	**内藤家**	長野県　伊那市	53
59	駿河	沼津藩	**水野家**	静岡県　沼津市	54
60	駿河	小島藩	**滝脇松平家**	静岡県　静岡市	55

三河ゆかりのまち一覧表（幕末時）④

No	旧国名	藩名	藩主家	現在の地名		地図番号
61	駿河	田中藩	**本多家**	静岡県	藤枝市	56
62	遠江	浜松藩	**井上家**	静岡県	浜松市	57
63	三河	吉田藩	**大河内松平家**	愛知県	豊橋市	58
64	三河	田原藩	**三宅家**	愛知県	田原市	59
65	三河	畑村藩	**戸田家**	愛知県	田原市	59
66	三河	西大平藩	**大岡家**	愛知県	岡崎市	61
67	三河	岡崎藩	**本多家**	愛知県	岡崎市	61
68	三河	挙母藩	**内藤家**	愛知県	豊田市	60
69	三河	西尾藩	**大給松平家**	愛知県	西尾市	62
70	三河	刈谷藩	**土井家**	愛知県	刈谷市	63
71	三河	西端藩	**本多家**	愛知県	碧南市	64
72	尾張	名古屋藩	**徳川家**	愛知県	名古屋市	65
73	尾張	犬山藩	**成瀬家**	愛知県	犬山市	66
74	美濃	岩村藩	**大給松平家**	岐阜県	恵那市	67
75	美濃	郡上八幡藩	**青山家**	岐阜県	郡上市	68
76	美濃	加納藩	**永井家**	岐阜県	岐阜市	69
77	美濃	大垣藩	**戸田家**	岐阜県	大垣市	70
78	美濃	高須藩	**松平（尾張）家**	岐阜県	海津市	71
79	越前	福井藩	**越前松平家**	福井県	福井市	72
80	越前	大野藩	**土井家**	福井県	大野市	73

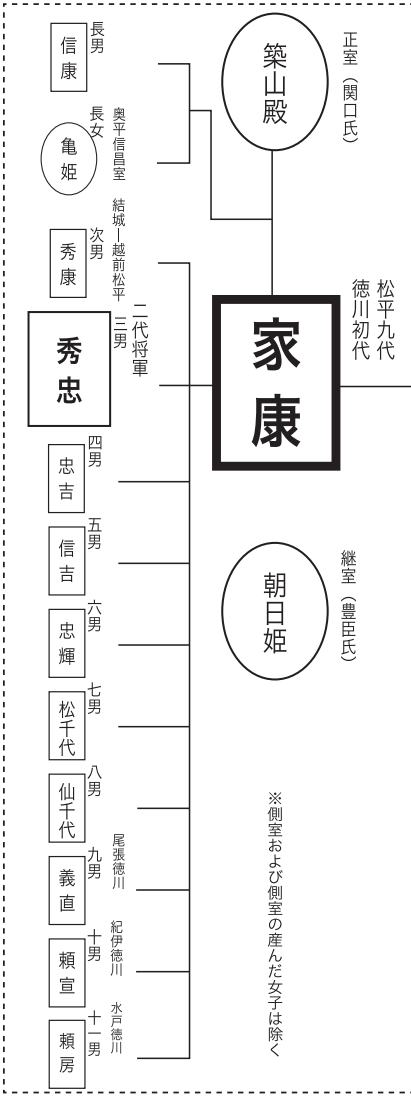
三河ゆかりのまち一覧表（幕末時）⑤

No	旧国名	藩名	藩主家	現在の地名	地図番号
81	越前	敦賀藩	**酒井家**	福井県　敦賀市	74
82	若狭	小浜藩	**酒井家**	福井県　小浜市	75
83	近江	彦根藩	**井伊家**	滋賀県　彦根市	76
84	近江	山上藩	**稲垣家**	滋賀県　東近江市	77
85	近江	膳所藩	**本多家**	滋賀県　大津市	78
86	伊勢	桑名藩	**久松松平家**	三重県　桑名市	79
87	伊勢	神戸藩	**本多家**	三重県　鈴鹿市	80
88	伊勢	亀山藩	**石川家**	三重県　亀山市	81
89	志摩	鳥羽藩	**稲垣家**	三重県　鳥羽市	82
90	大和	櫛羅藩	**永井家**	奈良県　御所市	83
91	大和	高取藩	**植村家**	奈良県　高市郡高取町	84
92	紀伊	新宮藩	**水野家**	和歌山県新宮市	85
93	紀伊	田辺藩	**安藤家**	和歌山県田辺市	86
94	紀伊	和歌山藩	**徳川家**	和歌山県和歌山市	87
95	和泉	伯太藩	**渡辺家**	大阪府　和泉市	88
96	河内	丹南藩	**高木家**	大阪府　松原市	89
97	摂津	高槻藩	**永井家**	大阪府　高槻市	90
98	丹後	田辺藩	**牧野家**	京都府　舞鶴市	91
99	丹波	亀山藩	**形原松平家**	京都府　亀岡市	92
100	丹波	篠山藩	**青山家**	兵庫県　篠山市	93

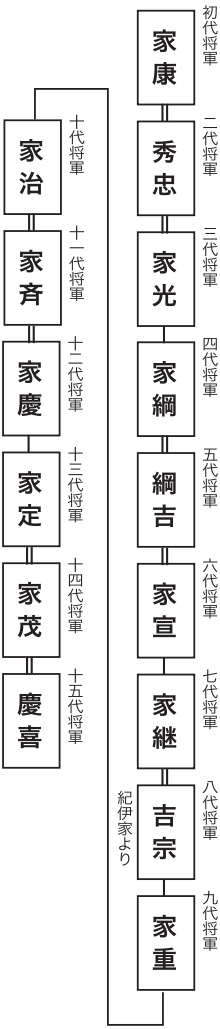
三河ゆかりのまち一覧表（幕末時）⑥

No	旧国名	藩名	藩主家	現在の地名		地図番号
101	播磨	明石藩	**越前松平家**	兵庫県	明石市	94
102	播磨	姫路藩	**酒井家**	兵庫県	姫路市	95
103	播磨	山崎藩	**本多家**	兵庫県	宍粟市	96
104	美作	津山藩	**越前松平家**	岡山県	津山市	97
105	美作	鶴田藩	**越智松平家**	岡山県	津山市	97
106	備中	庭瀬藩	**板倉家**	岡山県	岡山市	98
107	備中	松山藩	**板倉家**	岡山県	高梁市	99
108	出雲	母里藩	**越前松平家**	島根県	安来市	100
109	出雲	広瀬藩	**越前松平家**	島根県	安来市	100
110	出雲	松江藩	**越前松平家**	島根県	松江市	101
111	備後	福山藩	**阿部家**	広島県	福山市	102
112	讃岐	高松藩	**高松松平家**	香川県	高松市	103
113	伊予	西条藩	**松平（紀伊）家**	愛媛県	西条市	104
114	伊予	今治藩	**久松松平家**	愛媛県	今治市	105
115	伊予	松山藩	**久松松平家**	愛媛県	松山市	106
116	豊前	中津藩	**奥平家**	大分県	中津市	107
117	豊後	杵築藩	**能見松平家**	大分県	杵築市	108
118	豊後	府内藩	**大給松平家**	大分県	大分市	109
119	肥前	島原藩	**深溝松平家**	長崎県	島原市	110
120	日向	延岡藩	**内藤家**	宮崎県	延岡市	111

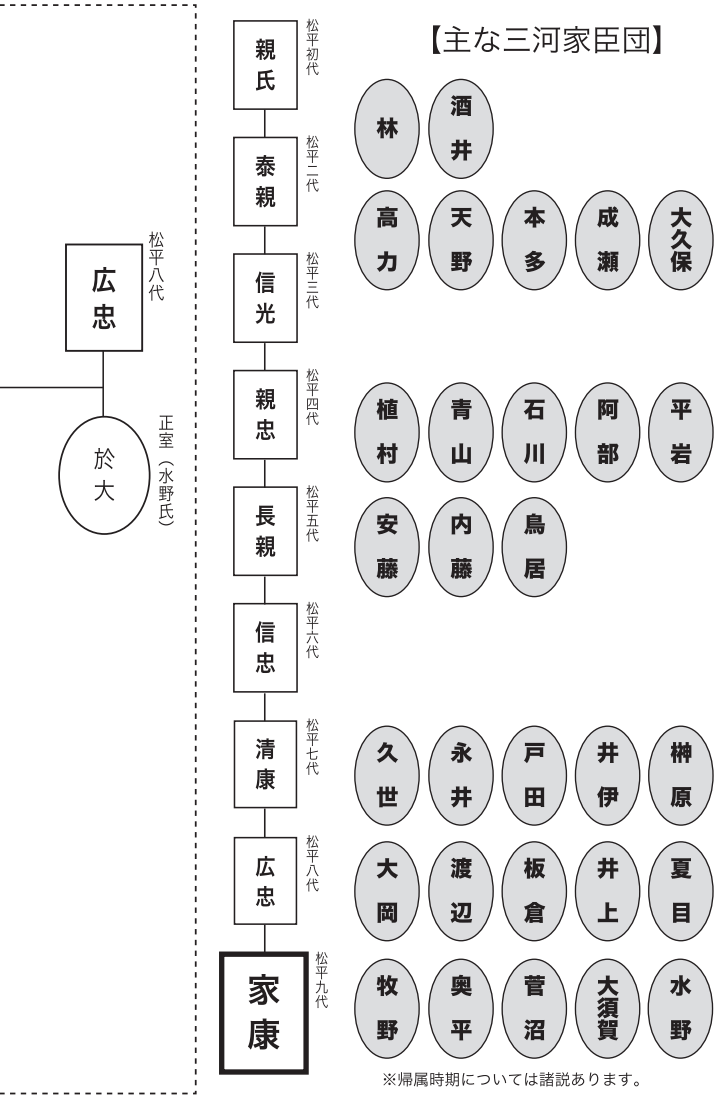
家康公を取り巻く家



【徳川十五代】



系図と主な三河家臣団



※帰属時期については諸説あります。

Ⅰ．三河風土

1　三河の自然と風土

家康公と譜代の家臣団を育てた三河。

家康公の先祖である松平氏発祥の地は西三河の山間部です。その一族が次第に勢力を伸ばしていったのが矢作川流域の平野部でした。そして後には家康公が東三河への進出を果たし、豊川流域の豊かな地を掌握したところから天下統一への道が開けました。

西三河は古来より南北の矢作川と東西の東海道が交差する要衝の地で、奈良時代にはすでに矢作の地に宿場町の形成が認められています。

矢作川は南アルプスの末端部を切り開くように流れ、岡崎平野（西三河平野）を潤し三河湾に注ぎます。岡崎平野の東部は矢作川や支流の乙川、巴川などの舟運が盛んで流通経済が発達、中世以降多くの武士たちをこの地に移住させる要件をそろえていたと言えます。

多くの恵みを与えてくれる矢作川やその支流の河川群は、三河の語源を「御川」とする説を生み出し、人材を育み天下への源流を思わせます。

矢作川、乙川などの舟運の象徴、
「五万石舟」のマンホール

2　古代国家「三河国」

７世紀後期（飛鳥時代後期）、律令制による地域区分が施され、三河国は、三河国造の支配地域（西三河四郡：加茂郡、額田郡、碧海郡、幡豆郡）と穂国造の支配地域（東三河）を合わせて成立したと考えられています。

この頃、矢作川右岸の渡河点付近に物部氏の氏寺とされる北野廃寺（岡崎市北野町）が建立され、これが西三河最古の寺と考えられています。同じ頃、矢作川を挟んだ東方の丘陵部にも物部真福により真福寺（岡崎市真福寺町）が建立されています。

律令制以前、愛知県は「尾張国造、三河国造、穂国造」の３つの勢力に分かれており、物部氏の祖先である知波夜命が最初の三河国造であったことからも、三河と物部氏の深い関わりを感じます。

岡崎市東阿知和町にある謁播神社が知波夜命を祭神として祀っています。

物部という文字は「もののふ」とも読まれ、物部氏が武士の前身にあたる役割を担っていたと考えられています。

三河には古代から武士たちのＤＮＡが感じられ、日本の武家政権の原点を感じます。

3　三河仏教の展開

平安時代、三河山間部から矢作川沿いに、天台・真言密教寺院が建立されていました。その一つ、瀧山寺は天台宗の寺院ですが、源頼朝によって伽藍が整備され、足利尊氏によって本堂が建立され、さらには、徳川将軍家からも手厚い庇護を受けるなど、時代の権力者たちとこの地域の深い繋がりが窺えます。

一方、鎌倉時代、末法思想による浄土信仰が盛んに布教されました。

矢作に存在した薬師寺（天台宗）で親鸞の高弟たちが念仏説法を始めました。これに深く帰依した人たちが各所に真宗（浄土真宗）道場を開き、この西三河の地域に真宗門徒や寺院が増えました。

親鸞の教えは民衆の願いに寄り添うもので、真宗の信者が増え、のちに蓮如の出現にも繋がり、やがて一向一揆の勃発に繋がっていくことになります。

また足利氏は禅宗、とりわけ臨済宗に深く帰依していました。尊氏は岡崎の主要な街道沿いに臨済宗の寺院を創建しようと考え、孫の三代将軍 義満の代になって立派な寺院が創建されました。これが天恩寺（岡崎市片寄町）です。

以来、西三河平野部は浄土真宗が、東三河と山間部には臨済宗や曹洞宗の禅宗が広がりました。

民衆の祈りが泰平国家の産声となりました。

コラム

・民衆の念仏と武士たちの雄叫びの中から―

日本に武家政権が出来上がってゆく時代、矢作川流域を中心とした三河の地に「風」の兆しを感じます。

大和の時代、物部氏が遺していったこの風土。そこに源氏の種が蒔かれ、武士の時代の芽が開き始めました。鎌倉に幕府ができると、西国から東国への境に矢作川があり、ここに足利の地盤が築かれました。源氏系の三河守護が置かれ、足利幕府とともに矢作川流域の足利勢力は天下に配されてゆきます。

やがて世は乱れ、この土壌に念仏の声が湧きあがってきました。東国から三河に入った親鸞がここで説き、さらに乱れた世は蓮如を呼び、民衆に深く祈りの心が浸み込んでゆきました。

念仏の空気が充満する三河の地に武家の雄叫びが錯綜する戦国の時代。

関東から新田源氏の系が三河松平郷に土着し、その勢力は西三河へ、さらに東三河へと覇を広げ、しかし乱世、不遇の時代がやってきました。

松平九代目家康公は、艱難辛苦を乗り越え、生涯を通して乱世を整え、泰平な江戸時代を開きました。

松平とともに、徳川とともに、この国の中央へ、地方へと向かい、乱から和へ収めていった先覚の人たち、そのふるさとは、三河です。

Ⅱ．三河武士の源流

1　源頼朝と瀧山寺

三河に源氏が巣立つ素地がありました。

瀧山寺（岡崎市滝町）に源頼朝と等身大の聖観音立像があり、その体内に頼朝の歯と髭が埋め込まれています。

頼朝の実母は、熱田大宮司・藤原季範の娘です。季範は別に「額田冠者」という称号が付されていました。額田（三河国額田郡＝現在の岡崎市、幸田町地域）を領する者です。

当時、額田第一の修験道場であった瀧山寺には頼朝と縁続きの僧がいました。叔父の祐範で、頼朝が伊豆に流された時には支援をしています。

このような縁もあり、頼朝は矢作川を中心とする西三河地方を軍事的な重要地域と捉え「関東御分国」とし、実弟の源範頼を三河の国司に、側近の安達盛長を三河守護に任じました。頼朝はさらに従弟の額田僧都、寛伝を日光山輪王寺の貫主として迎え、大きな地位を与えました。寛伝は瀧山寺に戻った後、その恩を忘れることはなく、頼朝が亡くなると寺内に総持禅院を建立し、京の仏師、運慶・湛慶に頼朝を偲び「聖観音立像」を製作させました。

奈良時代創建の瀧山寺本堂

2 足利一門の三河進出

源氏、足利一門が三河に集結します。

承久３年（１２２１）、承久の乱を抑えた足利義氏はその軍功により三河国の守護に任じられました。この時、一門を三河国矢作川の東岸流域に配置しました。一門は、その地名を苗字とし、細川氏、仁木氏、吉良氏、今川氏、一色氏などを名乗り、後に守護大名などとなって活躍します。さらに足利氏の奉公衆（旗本）もこの地に定住し在地領主となりました。

それから１００年後、足利義氏から５代の後の足利尊氏が、鎌倉の北条政権を倒し、後醍醐天皇とも対峙し、室町、足利幕府を開きました。

この時、大勢力が「矢作の館」に集結し京を目指した、と「太平記」にあり、それは岡崎の地を表しています。

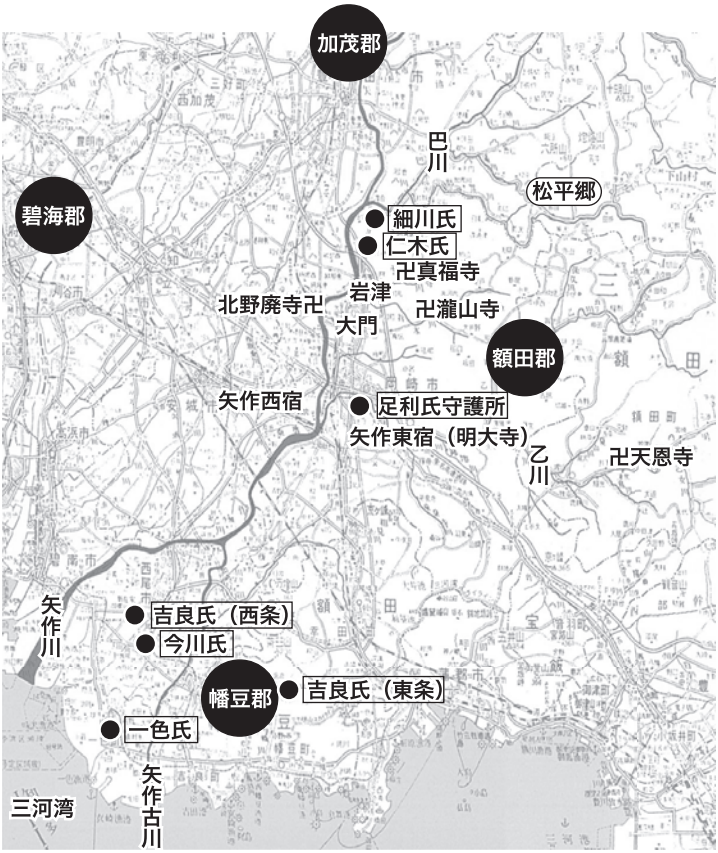
岡崎市大門の八剱神社には足利尊氏石宝塔が残ります。

源氏、足利の勢力がその幕府とともに各地に動き、守護などとなって活躍しており、そのふるさとは三河、矢作川流域です。

八剱神社の足利尊氏石宝塔

3　矢作川流域

三河国　矢作川流域（東岸）に配置された主な足利一門



●細川氏：額田郡細川郷（岡崎市）

‥‥室町幕府の管領（将軍補佐）を務め、江戸時代は熊本藩 54 万石の大名。熊本県知事や日本国首相を務めた細川護熙氏は子孫にあたる。

●仁木氏：額田郡仁木郷（岡崎市）

‥‥最大 9 ヶ国の守護に任じられるも専横により失脚。徳川四天王の一人、榊原康政は伊勢国榊原村に移り榊原姓を名乗った仁木氏の子孫。

●吉良氏：幡豆郡吉良荘（西尾市）

‥‥足利一門では将軍家に次ぐ名門とされ、江戸幕府では儀典（儀式の決まり）を司る高家筆頭を務めた。子孫に「忠臣蔵」で敵役とされた吉良上野介義央がいる。

●今川氏：幡豆郡今川荘（西尾市）

‥‥吉良氏の分家で代々駿河守護職を継ぐ。11 代義元は今川家の人質だった松平竹千代を扶育し、元服する際は一字を与え、元信と名乗らせた。

●一色氏：幡豆郡吉良荘一色（西尾市）

‥‥初代九州探題（九州の統治者）や三河をはじめ数ヶ国の守護を務めたが戦国時代に衰退。子孫からは晩年の家康公のブレーン、金地院崇伝が出る。

4　三河守護

三河守護のうち、源頼朝側近の安達盛長と足利家執事であった高師直一族は源氏の重臣、その他は全て「源氏」出身者であり、三河と源氏の深い結びつきが見てとれます。

＜鎌倉時代＞

主な守護名・在任年（諸説あり）

安達盛長　1194 ～ 1199

・・・・鎌倉幕府初代将軍 源頼朝の伊豆流人時代からの側近で、初代三河守護に任じられる。

足利義氏　1221 ～ 1252

・・・・後鳥羽上皇が討幕の兵を挙げた「承久の乱」鎮圧の戦功により、鎌倉と京の中間に位置する東海道の要衝、三河国の守護となる。矢作川東岸に一門を配置し、東国の盾とする。

足利氏　　～ 1331

＜室町時代＞

高　師兼　1337 ～ 1351

‥‥足利将軍家の奉公衆（直属の武士）。館を菅生郷（岡崎市籠田町辺り）に構える。

仁木義長　1351 ～ 1360

‥‥足利尊氏の信任が厚く、伊勢・伊賀・志摩・三河・遠江の守護職を兼任する。

大島（新田）義高　1360 ～ 1379

‥‥源氏の新田一族。在任期間中に松平郷に高月院が再建され、南北朝の争乱で新田義貞に従っていた宇都宮氏（後の大久保氏）が上和田郷（岡崎市上和田町）に入る。

一色氏　1379 ～ 1440

‥‥1392 年に南北朝が合一。足利三代将軍 義満による室町幕府の全盛期を迎える。

細川氏　1440 ～ 1478

‥‥守護代である西郷氏が竜頭山に砦を築く（現在の岡崎城）。吉良氏の被官衆や不満を持つ地元の奉公衆によって起こった一揆を西郷氏に代わり松平三代 信光が鎮圧。

松平氏が西三河一円に勢力を拡大する。

Ⅲ．松平の系譜

1　松平初代親氏

「三河譜代」とは、松平氏が西三河に勢力を拡大し、家康公が三河を統一する過程で、特に宗家に仕えてきた家臣たちを指します。一般に「岩津譜代」「安城譜代」「山中譜代」「岡崎譜代」と分類されます。

初代親氏は、諸国を行脚していた徳阿弥と称する時宗の僧であったといわれますが、徳川家の正式な系譜では新田世良田氏の末裔とされています。

松平郷の在地領主の太郎左衛門家に養子に入り松平親氏と名乗りました。親氏は松平郷をよく治め、道を造成し、橋を架け、次第に勢力を拡大していきました。

かつて、諸国を流浪していた折、信濃国で世話になり正月にウサギ汁でもてなされたという旧知の林藤助光政や、親氏の子とも伝えられる酒井広親が酒井氏の祖とも伝えられ、彼らがもっとも古い譜代家臣であったと考えられます。

コラム

ウサギ汁の吉縁で後に親氏に三河に呼び寄せられ、戊辰戦争では最後まで徹底抗戦し、明治新政府に改易された唯一の藩となった林家の請西藩は千葉県木更津市。酒井家は忠次の左衛門尉家と正親の雅楽頭家に分かれ、前者は出羽庄内藩（山形県鶴岡市）、後者は前橋藩（群馬県前橋市）～姫路藩（兵庫県姫路市）を宗家として徳川家を支えます。

2 松平三代信光

松平宗家三代目の信光は、初代親氏の二男です。叔父の松平二代泰親とともに、松平郷から矢作川沿岸の岩津に進出、新たに岩津城を築城します。

およそ 10 年後には岩津城域内に信光明寺を建立。本堂として「釈迦堂」（当時は本堂、現在は観音堂 / 国重文）を建て天皇の祈願所としました。

その後、寛正 6 年（1465）に西三河各地で吉良氏の被官たちによる一揆が勃発すると、守護代の西郷氏に代わってそれらを鎮圧して存在感を大いに示すと同時に、西郡（現在の蒲郡市）や長沢（豊川市）などに新たな知行地を得て一族を分封、勢力を拡大しました。

コラム

この時代の新たな家臣には、後の代表的三河武士、大久保氏、本多氏、成瀬氏、天野氏、高力氏などがいます。大久保家の小田原、本多忠勝系の最後は岡崎、本多作左衛門系は「一筆啓上」で越前丸岡（福井県坂井市）が有名、本多康重系は岡崎初代藩主から最後は信濃飯山藩（長野県飯山市）。ふるさとは三河です。

3 松平四代親忠

信光が死去したころ、安城城主となった親忠。もとは鴨田郷に館を構えていたと考えられています。

応仁元年（1467）、加茂郡の豪族らが岡崎に侵攻をした際、惣領家、岩津松平親長が京都にいて不在のため、親忠が一族を糾合してこれを破りました。この第一次井田野合戦から、親忠の求心力は高まり、宗家としての地位を確立したと考えられ、安城松平家から家康公に繋がる家系が成立しました。

親忠は一族の祈願所として文明２年（1470）に伊賀八幡宮（岡崎市伊賀町）を創建。また５年後には一族の菩提寺として大樹寺（岡崎市鴨田町）を創建しました。開基は勢誉愚底上人。「大樹」というのは、中国の言葉で「将軍」を意味すると言われ、勢誉上人によって命名されました。

コラム

この安城松平家に仕えた主な家臣たちが、阿部氏、石川氏、青山氏、鳥居氏、植村氏、大岡氏、内藤氏、平岩氏、安藤氏など、錚々たる三河武士たちです。

東京、青山通りの地名のもとになった青山氏は、郡上八幡城（岐阜県郡上市）で明治を迎えます。

高遠藩内藤家の江戸屋敷の地の中に元禄年間に新たな宿駅が開かれます。これが内藤新宿で、現在の東京・新宿です。

4 松平七代清康

親忠以来、松平宗家は安城城主が継ぎ、七代目の清康は若くして岡崎への進出を試みました。

大永 4 年（1524）、清康は大久保忠茂の献策に従い、岡崎松平信貞の支城、山中城を攻め落とし岡崎に進出します。この時の功績で市の徴税権を得た忠茂は税を免除して商人を集め、現在の連尺通りあたりで市が開かれ、商家の町が出来始めました。「岡崎開市」と呼ばれています。

大永 7 年（1527）、清康は山中城から明大寺の館に居館を移し、松平郷に倣い、奥州の塩竈六所明神から「六所明神」を勧請したと考えられています。

享禄3年(1530)、岡崎城を明大寺から現在の位置(龍頭山)に移し城域を拡張し、本丸には安城から甲山八幡宮を勧請。清康はこの時より精力的に三河統一に乗り出しほぼ制圧に成功します。

コラム

清康の時代に仕えた家臣に、大久保氏（宇津氏改姓）、榊原氏、大須賀氏、などが考えられます。

徳川四天王、榊原康政から始まる榊原氏は、群馬県館林、福島県白河市、兵庫県姫路市、新潟県村上市などを経て、新潟県上越市で明治を迎えました。

Ⅳ. 家康公生誕前夜

この時代・・・動乱、下剋上、そして新秩序を求めて

応仁の乱（1467 年）以後、足利将軍家の権威は失墜し、秩序なく土地の収奪が繰り返される時代となりました。形ばかりの守護大名は勢力を拡大しようとする地頭や地域の国人たちに侵食されていきました。

こうして生まれてきたのが戦国大名という新興の大名たちです。彼らは自分に従う家臣たちの本領を安堵し、功績を挙げれば新地を与え、褒美を出すなどして御家の安泰と発展に努めました。しかし大名と家臣たちの関係も所詮は「契約」、家臣が雇い主の大名にとって代わる「裏切り」「騙し」といった事態がしばしば見られました。これが「下克上」と呼ばれる風潮です。

家康公生誕前夜について、・・・

旧岡崎市史を編纂した柴田顕正氏はその別巻『徳川家康と其周囲』の中で次のように述べています。

「この家康誕生の頃は、世は正に秩序紊乱、所謂下剋上の時代、争闘破壊止む所を知らざる時代なりしも、この間に、やがて、旧習打破、新陳代謝の萌芽、社会組織の一変せんとする革新の機運の醸さるる時であり、その醸成の原動力足らんとする英雄の、この天文十一年に当たりて、織田信長は九歳、豊臣秀吉は七歳、武田信玄は二十二歳の青年、上杉謙信は十三歳の少年、関東を席巻したる北条氏康は二十八歳、中国の覇者たる毛利元就は四十六歳の活動ざかりの年輩であった―〈後略〉」

これを、山岡荘八氏の小説「徳川家康」の書き出しは、「武田信玄は二十一歳。上杉謙信は十二歳。織田信長は八歳。後の平民太閤、豊臣秀吉はしなびた垢面の六歳の小童だった。

この年、天文十年―――

一衣帯水の海のかなたは明の時代、ヨーロッパではチャールス五世が、フランシス一世に開戦を宣してフランスに侵入し、・・・

西も東も、同じ戦国の風雲に包まれた十六世紀中葉の、わが三州岡崎城の奥であった。・・・・・」

それでも各地に優れたリーダーが現れ始めました。

駿河の今川義元や甲斐の武田信玄などは独自の「分国法」をつくり、越後の上杉謙信は「義」を重んじ、これらの国内は安定した秩序を取り戻しました。

戦乱の世は、優れたリーダーたちによって、新しい秩序と安定の模索が始まっていました。

応仁の乱勃発から 75 年、天文１１年（1542)。

尾張では守護の斯波氏に代わって台頭した織田信秀が、豊かな経済基盤のもとで権力の掌握を進め、三河への侵攻を開始します。また駿河では今川義元が絶大な権力を持ち、甲斐の武田氏や相模の北条氏と領地を巡る駆け引きが活発になりました。

これらの大名たちにより戦国社会の再編が行われようとしていたこの年、１２月２６日、徳川家康公、岡崎城に誕生。

Ⅴ．家康公の生涯

1．生誕の時代

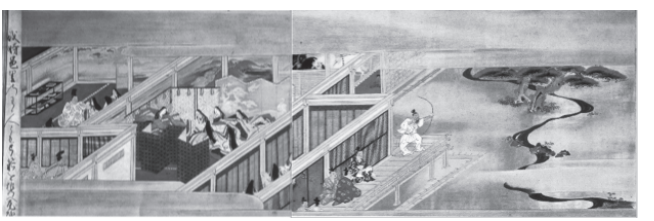
・尾張と駿河と三河

この頃の岡崎は尾張の織田氏と駿河の今川氏の勢力圏争いの中心にあり、周辺の松平一門も分裂の様相を呈していました。今川方の松平広忠は刈谷城主 水野忠政の娘・於大と結婚、縁戚関係を結ぶことによって尾張の織田信秀をけん制しました。しかし、天文 11 年（1542）の夏、織田・今川が直接衝突、第一次小豆坂合戦が岡崎領内で起き、広忠は窮地に陥ってしまいます。

・竹千代誕生

この年、12 月 26 日早暁、岡崎城の二の丸坂谷邸で誕生した子が、後の徳川家康公です。この時の様子が「東照社縁起絵巻」に描かれています。

縁側で「蟇目の矢」（魔除けの矢）を弾いているのが重臣の石川清兼、胞刀を抱えているのが酒井正親です。岡崎家中全体で家康公の生誕を祝っています。



・人質生活

竹千代は、6 歳から８歳までを織田氏のもとで、続けて１９歳までを駿府の今川氏のもとで人質として過ごしました。駿府では鳥居元忠、石川数正、平岩親吉らが小姓として仕え、苦楽を共にしました。

母方の祖母に当たる源応尼（華陽院）がその養育に当たり、慣れぬ土地でも卓屈になることなくすくすくと成長できました。また、今川家の重臣、太原雪斎から儒教や兵法の教育を受けていたとも伝わり、雪斎が住持を務めた臨済寺（静岡市葵区）ならびに清見寺（静岡市清水区）には家康公手習いの間が今も残ります。

竹千代は 14 歳で元服、今川義元自らが「烏帽子親」となり、名を元信と改めさせてその成長を祝福しました。

コラム

水野家、久松家、鳥居家

家康公の母 於大の実家は刈谷の水野家。継いだ水野勝成は家康公の従兄弟にあたり福山藩主。

幕末の水野家は、下総結城（茨城県結城市）、駿河沼津（沼津市）、上総鶴牧（千葉県市原市）、出羽山形（山形市）、紀伊新宮（和歌山県新宮市）。

於大の再嫁先、久松家の異父弟たちを松平一門に準じ久松松平家とし、幕末には伊予松山（松山市）、伊予今治（今治市）、伊勢桑名（桑名市）、下総多古（千葉県香取郡）があります。

鳥居元忠は家康公の人質時代から仕え、関ヶ原の戦い直前に伏見城を守り憤死、その子孫は磐城平１０万石へ、さらに山形藩２４万石に昇格しました。

２．自立の時代

・大樹寺で立志

永禄 3 年（1560)、駿河の太守 今川義元が尾張の織田信長と桶狭間で戦い無念の最期を遂げます。大高城の兵糧入れに成功し義元の到着を待っていた元康（後の家康公）は、城を脱出し命からがら大樹寺までたどり着きました。しかし追っ手に囲まれ、先祖の墓前で自決まで考えた時のことでした。時の住職であった登誉上人によって「生きる意味」「戦う意味」を諭され、「厭離穢土、欣求浄土」の言葉を自分自身の志として受け止めることができました。

・織田信長と同盟

家康公が岡崎城主として自立を果たそうとした時、その最も大きな力となったのが尾張の織田信長との同盟です。清洲城で結ばれたこの同盟は、言わば「不可侵条約」のような意味を持った内容であり、あくまでも対等の立場で協力し合うという内容でした。信長との関係にその勢力差が表れ、「築山信康事件」のようにいくつかの不幸がありましたが、互いに助け合うという基本的な内容は守られ続けました。

・三河一向一揆

家康公が自立する時、「三河一向一揆」は大変な危機でした。真宗の門徒でもあった譜代の家臣たちが二分して争いました。

上宮寺（岡崎市上佐々木町）・勝鬘寺（岡崎市針崎町）・本證寺（安城市野寺町）の三河三ヶ寺を中心に勃発した一揆は西三河一円に広がります。特に石川一族の多くが門徒側となります。その長老、石川清兼が門徒武士のリーダー的な存在であったからです。また本多一族では、後に家康公の右腕となる本多正信、大久保忠俊の娘婿の蜂屋貞次、後に尾張徳川家の付家老となる渡辺守綱なども激しく戦い、互いに血で血を洗う状況に陥りました。

およそ半年で和睦が成立しましたが、これは多くの門徒武士たちを家康公が赦免したからだと考えられます。

三河一向一揆の舞台
勝鬘寺

・戦国大名「徳川家康」誕生

家康公が初めて「徳川」を名乗ったのは 25 歳、三河全域をほぼ平定した時と考えられます。突然、松平から徳川に改めたのは、朝廷に正式に「三河守」を名乗ることを願い出て裁許されたという機会があったからです。家康公は永禄 9 年 (1566) 12 月 29 日に、「従五位下三河守」に叙任され、先祖とされる新田世良田徳川姓に改めました。

戦国大名徳川家康の誕生です。

そしてここから新たなステージに向かい始めることになります。家康公は三河武士団の再編に乗り出し、整った軍

事組織を作ることに成功しました。

（「三備の制」※Ｐ35 参照）

・東三河の統一

豊川は流路が短く、流れが急峻、低湿地帯で蛇行しています。氾濫が日常茶飯事のように起こりましたが、土地はそのたびに肥沃になっていきました。

豊かな「穂の国」とは、豊川の氾濫がもたらしたもの、とも言えます。従ってこの地域には古来より多くの富裕層が誕生し、それらが戦国期の豪族（国人）となっていました。

嵩山中山地域（豊橋市嵩山町）の西郷氏、牛久保周辺（豊川市牛久保町）の牧野氏、野田地域（新城市豊島）の菅沼氏などはその代表的存在です。さらに奥三河には作手地域（新城市作手）に奥平氏が強い勢力を保っていました。彼らは家康公が西三河の統一を成したころには、今川氏真との盟約関係を離れ、松平方に接近していました。従ってこの頃からの三河譜代家臣と考えても差し支えなさそうです。

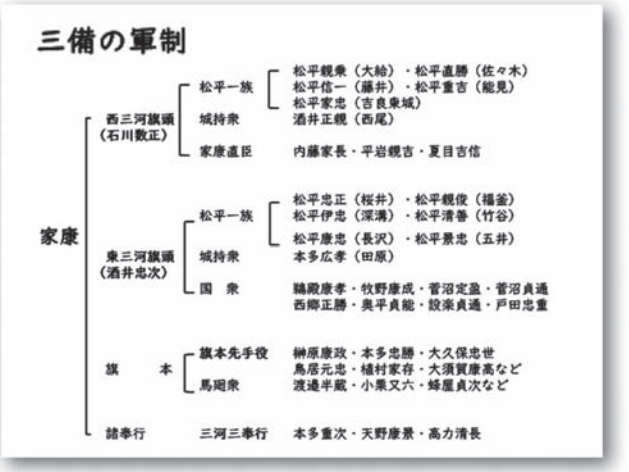
牧野氏は江戸開幕期には上野国の大胡藩主となり、その後、越後長岡藩主となって明治維新を迎えます。官軍と果敢に戦った河井継之助や海軍大将の山本五十六を輩出した藩としても有名です。

嵩山の西郷氏は家康公の三男・秀忠、四男・忠吉の母である西郷局を輩出しました。

作手の奥平氏は長篠城の攻防で有名になります。城主信昌に家康公の娘である亀姫が嫁ぎ、江戸開幕期には美濃加納藩初代藩主に、後に子孫が豊前国中津藩主になり明治を迎えました。

家康公は東三河の国人たちを介して今川氏真と戦うこと

になりますが、吉田城は酒井忠次が、田原城は本多広孝が中心となって攻め、攻略後は彼らが城主となったのです。



コラム

東西三河は一つ

東三河の旗頭に酒井忠次が就き、その勢力のもとに新たな三河武士団が徳川譜代として支えてゆきました。

牧野氏は、越後長岡藩（新潟県長岡市）、越後三根山藩（新潟市）、常陸笠間藩（茨城県笠間市）、信濃小諸藩（長野県小諸市）、丹後田辺藩（京都府舞鶴市）があります。同じく、奥平氏は、豊前中津藩（大分県中津市）、武蔵忍藩（埼玉県行田市）、上野小幡藩（群馬県甘楽郡）があります。

3．隆盛と試練の時代

・浜松城に移る

三河一国を平定した家康公は、永禄 11 年（1568）遠江（現在の静岡県西部）に攻め入り勢力拡大を目指します。今川側の城である井伊谷城・刑部城・白須賀城などを次々に屈伏させて曳馬城（現在の浜松市）に入りました。

井伊谷の地は井伊家の領地で、後に直政は家康公に見出され、徳川四天王の一人に成長します。

武田信玄の駿府侵攻により、今川氏真は掛川城（静岡県掛川市）に逃げ込みましたが、家康公に攻められ和睦。戦国大名としての今川氏は滅びます。

遠江の地を配下に収めた家康公は、甲斐の武田信玄に対峙するために、元亀元年（1570）居城を岡崎城から曳馬城に移して「浜松城」と名付けました。岡崎城は、長男の松平信康を城主にして守らせることとなりました。

・姉川の戦い、三方ヶ原の戦い

家康公が浜松の地に入った頃、同盟者の織田信長は、近江の浅井長政、越前の朝倉義景と対立していました。

元亀元年（1570）６月に姉川の戦い（滋賀県長浜市）がおこります。この時、家康公はおよそ五千の兵を率いて参戦、倍ほどの兵力で攻めてくる朝倉軍と戦いました。この戦いでは本多忠勝や榊原康政など「旗本先手役」が機動力をいかして奮戦しました。

2 年後の元亀 3 年（1572）、今度は甲斐の武田信玄が遠江に侵入を始めます。

天竜川を越えて偵察に出た家康公を待っていたのは夥しい数の武田兵でした。急ぎ退却する徳川本隊の殿を務め、武田軍を止めた功労者が本多忠勝です。

戦いの地となった「一言坂」（磐田市）には「家康に過ぎたるものが二つあり、唐の頭と本多平八」という札が掲げられたといいます。

圧倒的な兵力と強さを誇る武田軍に対し、籠城戦を勧める家臣が多い中、家康公は城の手前で反転した武田軍を追いました。結果、三方ヶ原の祝田坂で待ち受ける信玄の本隊に惨敗。この時には夏目吉信など、家康公の身代わりとなって落命する武士もいました。

浜松市の「犀ヶ崖」には、激戦を物語る戦跡が残されています。浜松城を包囲しようとした武田軍に、大久保忠世、忠佐兄弟が鉄砲で夜襲を敢行し、大勢の武田兵が崖から落ちて落命したと伝わる場所です。

・長篠・設楽原の戦い

三方ヶ原の戦いに勝利した武田信玄は、その数ヶ月後には病死（信玄の死には諸説あり）しました。後を継いだ息子の勝頼は、天正 3 年（1575）三河に侵入し、徳川側についた長篠城を大軍で包囲します。城主の奥平信昌は粘り強く戦い、家康公の援軍を待ちます。この時、信昌の家臣 鳥居強右衛門は、敵の包囲網を潜り抜け岡崎城まで駆けつけ

て城の危機を訴えました。急ぎの出陣を取り付けた強右衛門は長篠城に戻ろうとしますが敵につかまり、味方の城兵の目の前で処刑されました。

援軍に駆け付けた徳川・織田の連合軍は、設楽原に陣取り、武田軍を誘い出しました。この時には馬防柵を設け、夥しい数の鉄砲で武田の騎馬隊を壊滅させました。長篠合戦屏風には、酒井忠次や、大久保兄弟（忠世・忠佐）の様子など、三河武士たちの活躍が細かく描かれています。戦国最強と謳われた武田軍も、多くの重臣を失い、これ以降は次第にその力も失われていきました。

・信康事件

信康事件について、一般的には信康の妻である徳姫が父・信長に対し、信康や築山殿の悪行を書き送ったことから、信長が家康公に信康の処分を要求したと伝えらえます。

信長の信康処断命令の真偽は明らかではありませんが、結局、信康は大浜（愛知県碧南市）、堀江城（浜松市）、二俣城（浜松市）を転々とした後、自害をすることになりました。

徳川家の存続のために自らの命を絶った我が子のために、二俣城近くの清瀧寺に立派な墓を建てましたが、嫡男を失ったことは家康公の心に後年まで深い傷跡を残すこととなりました。

信康の傅役であった平岩親吉や岡崎城代であった石川数正、切腹時に命じられた介錯を実行できなかった服部半蔵らにとって最大の悲しみとなりました。信長との同盟関係

を維持するために、家康公に与えられた最大の試練になりました。

コラム

三河武士たち

この頃、三河武士の強さが光ります。酒井忠次、本多忠勝、榊原康政、井伊直政の徳川四天王が光ります。

酒井宗家は出羽庄内（鶴岡市）、本多宗家は三河岡崎、榊原宗家は越後高田（上越市）、井伊宗家は近江彦根で明治を迎えます。

信康の傅役の平岩親吉は信長亡き後、甲斐甲府を治め、関東移封では厩橋（前橋市）に入り、関ヶ原ののち、再び甲府、さらに尾張徳川家の付家老として犬山城主となりました。

4．関東移封

・伊賀越え―五ヶ国大名へ

天正 10 年（1582）、本能寺の変で織田信長が明智光秀によって討たれた際、家康公は２日前から堺に滞在していました。事件の一報を受けた家康公一行は急遽三河へ戻ることを決意します。そして堺から岡崎までわずか３日間（『家忠日記』）という驚異的なスピードで進んだ脱出劇のことを、「伊賀越え」といいます。この強行軍の裏には、服部半蔵正成を始めとする伊賀者の協力、茶屋四郎次郎清延ら商人の手助けがありました。

岡崎に戻った家康公は京都に行かず、甲信地方の鎮定にあたり、信長不在の暴動や北条氏・上杉氏らとの利権争いを速やかに収めました（天正壬午の乱）。

家康公は旧武田氏の遺臣達を次々に帰属させて支配下に置いてゆきました。徳川家の領地は、これまでの三河・遠江・駿河に加え、甲斐（山梨県）・信濃（長野県）が加わり五ヶ国となりました。

「伊賀越え」で家康公一行が通ったと伝わる御斎峠の碑（伊賀市）

・小牧・長久手の合戦

明智光秀を討った秀吉は発言権を強め、柴田勝家を賤ヶ岳の戦いで破ると、いよいよ信長の後継者としての地位を固めてゆきました。秀吉の台頭に危機感を持つ頃、信長の

二男・信雄からの協力要請を受けて、小牧・長久手の戦いが起こります。

緒戦で、酒井忠次による小牧山奪取が功を奏し家康公は盤石の陣を敷きます。

秀吉との対陣が膠着状態になると、秀吉の織田家に対する不忠を揶揄した榊原康政の檄文が秀吉を怒らせ、功を焦った池田恒興や森長可らの無謀な作戦を誘発。結果、この作戦の大将に指名された甥の三好秀次軍が徳川の追撃軍に大敗し、驚いて戻る池田隊や森隊を家康公本隊が長久手で迎撃しました。

長久手の戦いでは、赤備えで有名な井伊直政らが活躍し大勝利します。この時、救援に向かう秀吉を本多忠勝がわずかの兵力で威嚇し、秀吉を驚かせました。

やがて信雄が秀吉と和睦をしたことにより、家康公は戦の大義を失って戦いは終わりました。

この戦いで後の「徳川四天王」の存在を秀吉に知らしめる結果になりました。

・家康公の領国支配

天正 10 年（1582)、本能寺の変で信長が倒れると、武田氏旧領の甲斐・信濃国では武田の遺臣たちによる一揆が頻発しました。家康公はこれらの一揆を鎮撫しながら、信州小諸城に大久保忠世、甲府城には平岩親吉、甲斐郡内には鳥居元忠らの重臣を配し、次第に支配権を強めました。その時、武力では領民たちの掌握はできず、進めたのが「五ヶ

国総検地」です。

検地奉行には三河譜代の伊奈忠次を始め、今川遺臣の彦坂元正、武田遺臣の大久保長安が登用されました。秀吉による「太閤検地」と同様、耕作者を「名請人」として年貢を直納させ、旧来の複雑な徴収を廃止しました。農民だけでなく、寺社や小領主毎に検地帳を作成し、さらに「検地目録」を作成しました。様々な状況を勘案した税の徴収制度です。

家康公は領民たちに対するきめ細かい政策によって、郷村の掌握を成し遂げてゆきました。力を持った者だけが横暴を許される、いわゆる戦乱の世の構造が少しずつ変化してゆきました。

・江戸の町づくり

天正 18 年（1590)、小田原の陣が終わると、家康公は秀吉により関東への移封（国替え）を命じられました。家康公がまず手がけたことは、家臣団の配置でした。江戸に流入する主要な街道の入り口には、井伊直政（上野国高崎)、榊原康政（上野国館林)、大久保忠世（相模国小田原）など主要な重臣を配置しました。

同時に江戸の町づくりにも着手し、武士団や職人たちの住居建設、それに伴う物資流入のための道路や水路建設など、狭小閑村であった漁業の村を変貌させていったのです。江戸城建設のために必要なことだったとはいえ、集住する人々の利便性を考慮した町割りやインフラ整備は、これまでの

都市建設では見られないことでした。その中心となって手腕を発揮したのが江戸町奉行の青山忠成や内藤清成です。彼らは江戸城の付近に広大な屋敷を構えましたが、その地名が彼らの名をとって「青山」「内藤新宿」と現在でも使われています。

内藤新宿

コラム

関東を築く

屈強な三河武士たちが江戸社会のもとを築きました。

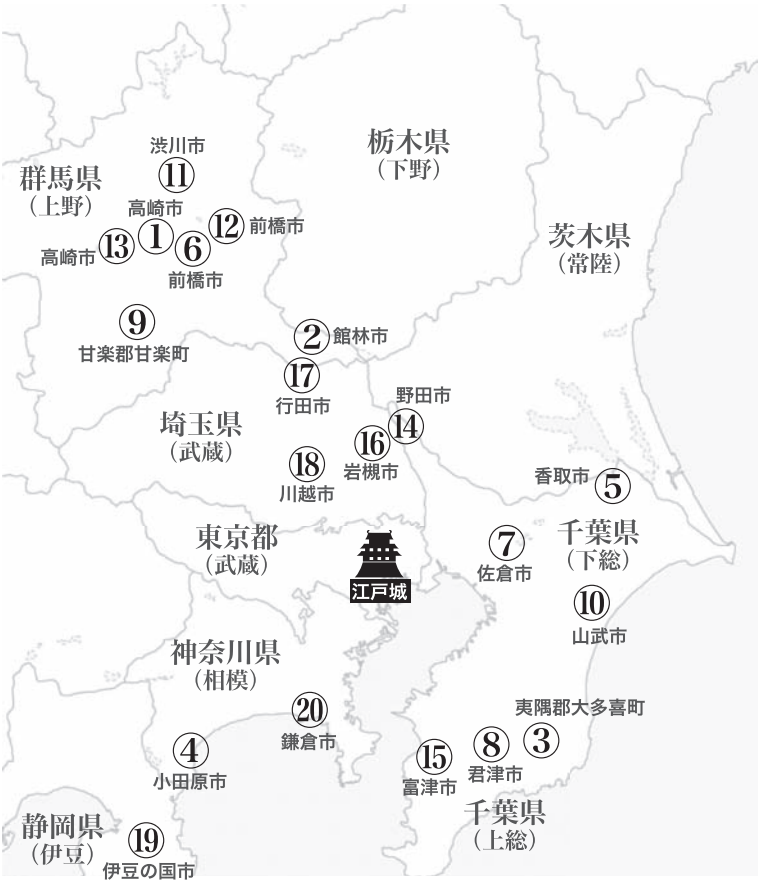
周囲の不穏な空気を睨むように三河武士たちが配置され、堅牢な城下町行政が敷かれ、江戸時代を通じ、さらに今日に至る日本の首都圏の核たる町が築かれました。

今の千葉県あたり。隠居した酒井忠次の嫡男、家次が佐倉の地に臼井３万石で入り、本多忠勝は大多喜１０万石。鳥居元忠は千葉県香取あたり、矢作４万石など江戸の東を押さえます。家康公五男 武田信吉が下総小金城３万石（松戸市）に入り、佐倉そして水戸２５万石へ。

群馬県あたりは、榊原康政が館林に１０万石で、井伊直政が箕輪から高崎藩を起こし 12 万石。平岩親吉が前橋３万石。神奈川県あたりは、大久保忠世が小田原を治め、韮山に内藤信成が入ります。

関東の町々は三河武士たちが整えてゆきました。

家康公の関東移封後の主な家臣たちの知行地



武将名	転封先	備　考
① 井伊直政	上野箕輪後高崎１２万石	関ヶ原後　彦根藩主
② 榊原康政	上野館林１０万石	関ヶ原後もそのまま
③ 本多忠勝	上総大多喜１０万石	関ヶ原後　伊勢桑名藩主
④ 大久保忠世	相模小田原４万石	忠隣の時改易、孫忠職で復帰
⑤ 鳥居元忠	下総矢作４万石	子の忠政が陸奥磐城平藩主
⑥ 平岩親吉	上野厩橋３万石	甲府6万3千石、後　犬山12万3千石
⑦ 酒井家次	下総臼井３万石	後　高崎5万石、後に越後高田10万石、鶴岡15万石
⑧ 大須賀忠政	上総久留里３万石	関ヶ原後　遠江横須賀6万石
⑨ 奥平信昌	上野小幡２万石	関ヶ原後　美濃加納10万石
⑩ 石川康通	上総成戸２万石	家成長男　後に大垣5万石
⑪ 本多康重	上野白井２万石	後に岡崎5万石初代藩主
⑫ 牧野康成	上野大胡２万石	子の忠成の時　越後長岡藩主
⑬ 菅沼定利	上野吉井２万石	田峯菅沼の血統
⑭ 松平康元	下総関宿２万石	家康の異父弟　久松家
⑮ 内藤家長	上総佐貫２万石	伏見城の戦いで死去
⑯ 高力清長	武蔵岩槻２万石	孫が初代島原藩主、後　旗本
⑰ 松平家忠	武蔵忍１万石	子孫は島原藩主に
⑱ 酒井重忠	武蔵川越１万石	後　上野厩橋3万3千石
⑲ 内藤信成	伊豆韮山１万石	後　駿河国４万石の領主　子孫は高遠藩3万3千石
⑳ 本多正信	相模甘縄１万石	子の正純の時に改易

5．江戸幕府を開く

・政治家としての理念を学ぶ

家康公は戦さのない平和な社会での武士のあり方を考えていました。

一つには政治の仕組みを作り、それを実行する行政能力を求めました。

二つ目には、平和で安全な社会を守る倫理観を求めました。

戦乱の無秩序な時代を繰り返さないためにも、このような新しい武士の姿が必要と考えたのです。そのために家康公は学問を重視し、特に秀吉が朝鮮出兵を強行している間には藤原惺窩から主に朱子学を学んだとされます。朱子学は人の道の正義を強く求める学問でもあり、武士道についても「悪を討つもの」と断じています。武功派と呼ばれた武士たちが次第に表舞台で活躍することはなくなり、平和な時代にこそ必要な武士の資質を学ばせたのです。

・関ヶ原の合戦と大名仕置き

秀吉亡き後、吏僚派の奉行であった石田三成と古くからの子飼いの武将たち、加藤清正、福島正則、加藤嘉明ら武断派といわれる武将たちとの対立が深まります。家康公は三成を近江 佐和山城に蟄居させることで事態の収拾を図りました。この間に三成は家康公に反対する大名たちに声をかけ、天下分け目の合戦と呼ばれる関ヶ原の合戦が勃発します。

ひとたび平和になりかけた社会が再び戦乱の時代に逆行する恐れのある中で、家康公は自分に従う武将たちをまとめ、三成を中心とする勢力の一掃を図りました。これが関ヶ原合戦の構図です。

慶長５年（1600）、関ヶ原の本戦は「小山評定」（栃木県小山市）で家康公に従った豊臣大名らを中心に展開しますが、井伊直政が先陣を切るなど徳川の武将たちも大活躍をしました。小早川秀秋の東軍参加もあり、およそ半日で決着がつきましたが、家康公にとっては日本の歴史を動かそうとする大きな決断と、命懸けの戦いであったことも事実です。

合戦後には本多忠勝、榊原康政、井伊直政によって全国の大名配置が策定され、家康公による天下の平定作業が進められました。近年の研究では関ケ原の合戦で生じた10万とも15万ともいわれる浪人たちの再雇用が外様大名たちを高禄に遇した目的の一つであったと考えられています。家康公にとっては目の前の勝利より、この後の治安維持に頭を痛めていたものと思われます。

・新たな施策と三河武士たち

家康公が江戸に幕府を開くまでに、多くの施策が実行されています。特に流通の重要性を考え、伝馬制を取り入れた街道の整備を、また大久保長安を金山奉行に抜擢し、金銀の貨幣をしっかりと定めて通貨の安定を図りました。

さらに京都所司代に板倉勝重を置き、朝廷とのパイプ役を行わせました。また武士たちへの教育の必要性から木版

印刷による出版事業を開始、海外との交易も盛んにするため朱印船貿易も活発に行いました。

こういった諸施策は、これまでの武将ではなく、実務に長けた官僚ともいえる武士たちを登用することで実現してゆきました。本多正信・正純父子、土井利勝、大久保忠隣などの武士たちです。

・征夷大将軍になる

慶長 8 年（1603）、家康公は征夷大将軍に任じられ江戸に幕府を開きました。

この年、秀吉との生前の約束通り、孫の千姫を大坂城の豊臣秀吉の遺児 秀頼のもとへ嫁がせました。翌年には秀忠に念願の男子が誕生し（後の三代将軍 家光）、また懸案であった朝鮮国との国交が回復をすると、慶長 10 年（1605）には将軍職を秀忠に譲ります。これは徳川氏による政権が続くことを知らしめ、後継を巡っての争いを避けるためであったとも考えられます。そして慶長 12 年（1607）には駿府城を修築し、自らは隠居として江戸から移ります。しかし実際には江戸の幕府と密接な連絡を取り、大御所として実権を握り続けました。

関ヶ原合戦後の大名配置

関ヶ原の合戦の戦後処理により、石田三成の西軍についた武将たちは改易（かいえき）・減封（げんぽう）、家康公の東軍についた武将たちは加増または所領を安堵（あんど）されました。

徳川家の親藩（しんぱん）・譜代の大名は主に関東から東海、近江にかけての要地に配され、外様大名は遠隔（えんかく）地に配置されています。大坂城の豊臣家（秀頼）は約１６０万石を減封され、６５万石の一大名並みとなったのです。

図：関ヶ原合戦後の三河譜代大名（約55人）の配置地域（グレーの部分）

6．元和偃武

・大坂の陣

家康公が最も頭を痛めていたことは、関ヶ原合戦後の浪人たちの問題です。

西国の大名たちの加増は彼らの再雇用を考慮したものであったという研究がなされていますが、それでも 8 万人ともいわれる浪人たちが再びの活躍の場を求めて大坂城に集結してしまいました。

「これが最後の戦い」と心に強い決意をもって、73 歳の家康公は再び馬上の人となります。冬の陣（慶長 19 年(1614)）では大坂方の真田信繁（幸村）の活躍もあり、秀頼と和議を結びますが、好戦派の武士たちによって再び大規模な戦いが起こります。これが夏の陣(慶長20年(1615))です。最終的には秀頼・淀君親子を自刃に追い込み、最後の戦いも終わりを告げました。この時、家康公は 74 歳。

・武家諸法度

大坂夏の陣終結後に元号を「元和」と改め、ここから本当の平和な時代が始まる、という家康公の並々ならぬ決意を示し、「元和偃武」といいます。

その決意が「武家諸法度」。

それは具体的な武士たちの守るべき内容を定めたもので、主に次のような内容が記されています。

「一、文武弓馬ノ道、専ラ相嗜ムベキ事」

新しい平和な時代の武士のあり方は「文」と「武」の両立であるということを示しています。

「一、知行所務清廉ニコレヲ沙汰シ、非法致サズ、国郡衰弊セシムベカラザル事」

「一、道路・駅馬・舟梁等断絶無ク、往還ノ停滞ヲ致サシムベカラザル事」

武家諸法度の主な目的が「領民への善政」であったことがうかがえます。武士たちに、決して非法をすることなく、正しい政治を行うように求めています。

これこそが新しい平和な時代を担う武士たちへの厳しい要求だったのです。

・禁中並公家諸法度

「禁中」とは天皇のことを意味します。この法令も武家諸法度と同様に金地院崇伝によって起草されました。

「一、天子諸藝能之事、第一御學問也。不學則不明古道…」

第一条冒頭の部分では、天皇の文化的な活動の第一は学問をすることと定めています。日本古来の様々な文化やしきたりが分からなくなってしまうからという理由です。政治は武家政権に任せ、朝廷が政治を混乱させることがないようにしたいという意図が見えています。これは現代の天皇に対する憲法の規定にも似た所があり、非常に重要です。

家康公の生涯　まとめ

・日本の礎を整えて――

コラム

戦さのない国を創りました

慶長５年（1600）関ヶ原を征し、慶長８年（1603）江戸開幕、全国に三河譜代の藩と町が起きてゆきます。

まず、東海道の要、尾張一国を家康公四男 松平忠吉が押え、隣の伊勢桑名に最強の三河武士、本多忠勝が来ました。豊臣、石田三成の空気が漂う近江彦根に井伊直政が入り琵琶湖を押え、家康公次女 督姫を娶った池田輝政が西国と畿内を結ぶ姫路に入り播磨を押え、この重要地には後に本多、松平、榊原、酒井と三河武士団が転封されてきます。

家康公次男、結城秀康は北陸道を押える越前一国を与えられ、北ノ庄を福井と改称。北方の伊達、上杉の監視に家康公五男 武田信吉、のちに家康公十一男 頼房が入って御三家水戸藩とします。家康公三女を娶った蒲生秀行が会津に入り、後に二代将軍 秀忠の子、保科正之により会津を確立します。

豊臣恩顧にして東軍徳川方についた大物武将たち。岡崎城の田中吉政は筑後柳川へ、山内一豊は土佐へ、加藤清正は肥後熊本へ、黒田長政は筑前へ、福島正則は安芸。大坂の陣の後、西国外様の押さえとして、家康公の従弟、暴れん坊水野勝成を備後福山（広島県）に配します。

まだ戦さの空気が漂うころ、緊張感ある大名配置が不穏を封じます。

コラム

泰平、徳川日本ができました

「この紋所が目に入らぬか」という葵の権威。

江戸期２６５年は盤石な国家体制とともに各地に日本の文化が芽生えてゆきます。

幕藩体制ができ、転封、改易が繰り返されながらも、江戸時代を通して全国各地の都市が整ってゆきました。そして日本の原型ができました。

そのまち、例えば・・。

福島県会津若松市は、家門松平氏のまち。福島市は本多、堀田、板倉と続く譜代のまち。山形県鶴岡市の庄内藩は酒井忠勝が城下を整備。以降、酒井氏十二代が遺したまちで、藤沢周平が綴る「海坂藩」がここにあります。

山形市は鳥居元忠の嫡男、忠政が城下を整備、以来、保科、松平、堀田など家門譜代十一家を経て水野で明治を迎えます。

茨城県も結城市、古河市、笠間市など ８ 藩が三河譜代のまち。

栃木県も宇都宮市、那須烏山市、足利市、日光市など譜代のまち。

小江戸という川越は雅楽頭系の酒井が入り、以後、松平信綱など幕府重臣、譜代が治めてゆきます。

Ⅵ．泰平、江戸時代

江戸時代を通じて、多くの三河ゆかりの人たちが、
この国のために生きてきました。
ここではその前期、中期、後期の３人を紹介します。

１．伊奈忠次…治水、新田開発事業

関東で、国土づくりで有名な伊奈忠次は、三河国幡豆郡小島城（西尾市小島町）出身の三河武士です。

忠次は家康公の三ヶ国（三河・遠江・駿河）統治時代に検地代官などを務めた小栗吉忠（おぐりよしただ）の傍（そば）に仕え、後にその跡を継いで代官になりました。家康公の五ヶ国統治時代には奉行衆となり、総検地を進める責任者として活躍しました。

忠次は家康公の関東移封に伴い、武蔵国足立郡小室（埼玉県北足立郡伊奈町小室）及び鴻巣（こうのす）（埼玉県鴻巣市）に１万石を与えられ大名となりました。また、関東の代官頭（だいかんがしら）として大久保長安や彦坂元正らと共に各地の検地、新田開発（しんでんかいはつ）、河川改修を実行します。特に、利根川（とねがわ）や荒川の流路（りゅうろ）を変える付替（つけか）え工事や検地による家臣たちの知行割（ちぎょうわり）など、家康公の関東支配を強力に推し進めました。このことは後に江戸幕府が開かれた際の、財政的な基盤の確立に大きな影響を与えます。

例えば、埼玉県北部を流れる利根川からおよそ 20 ㎞に及

ぶ用水路を掘削。

現在の埼玉県の深谷市や熊谷市の農業を潤すことになった用水路を、忠次の官職名である備前守から親しみを込めて「備前渠」とか「備前堀」と呼んでいます。「備前堤」と呼ばれる堤防も荒川と綾瀬川を分離するために造られたものと伝わり、埼玉県蓮田市地域の防災や新田の開発に大いに役立ったと伝えられます。

また茨城県水戸市にも「備前堀」という用水路があります。この堀も忠次によって掘削された灌漑用水であり、桜川流域の治水と利水を兼ねたものでした。その功績を称え、備前堀の道明橋に忠次の銅像が建立されています。

忠次は農民に炭焼き、養蚕、製塩などの事業も行わせ、桑、麻などの栽培を推奨しました。埼玉県北足立郡伊奈町は忠次が陣屋を置いた地であり、町名の由来にもなっています。

この町では特に「忠次プロジェクト推進協議会」という組織を結成し、多くの人々にその功績を広めています。

伊奈忠次像（水戸市）

2．大岡忠相・・江戸町奉行

大坂の陣が終わり「元和偃武」が宣言されてからちょうど 100 年後の享保元年（1716）、八代将軍吉宗により「享保の改革」が始まりました。この幕政改革に江戸町奉行として、主に都市政策に携わったのが大岡忠相です。テレビドラマでも有名な「大岡越前守」のことです。

この大岡氏の先祖について、「大岡氏系譜」によれば、東三河の新城市大岡に居住したことから大岡姓を名乗るようになったとあります。後に安城市の大岡白山神社の神職となり、家康公の父・広忠の時代に松平氏に仕えたようです。

忠相の忠の諱は広忠に由来し、大岡氏代々の通字となっていました。後に旗本から一万石の大名となり、三河国西大平藩主になったことは、三河譜代の大岡氏にとってふるさとに戻ることを意味しました。

大岡忠相の活躍は江戸町奉行としての「大岡裁き」で有名ですが、これは「大岡政談」という創作物に由来しています。

忠相は吉宗に抜擢され、江戸の都市政策について手腕を発揮しました。また司法にも携わり、町奉行の権限が拡大する中で、庶民の訴えを聞く「目安箱」の取り扱いを始め、裁判の判例を整理し、合理的な裁判を行っていったことも事実です。後に寺社奉行に出世してからも吉宗に認められ「公事方御定書」（役人の行動規範や裁判の判例）の編纂に携わりました。

一方で市政においては、度々大火に見舞われてきた木造家屋過密地域の防火体制を強化するため、享保３年（1718）には町火消組合を創設、２年後には「いろは四十七組（後に四十八組）」の町火消組織を再編成しました。これは現代の地域消防団に繋がるものです。また貧民のための養生院設置の要望が寄せられると、吉宗からの命もあり、江戸小石川薬園内に小石川養生所が設置されました（東京都文京区）。

大岡忠相の残した業績は大きく、江戸泰平社会の土台をしっかりと再構築したのです。

西大平藩陣屋跡（岡崎市大平町）

コラム

名奉行、大岡越前守忠相を藩祖とする西大平藩は岡崎市にあり、神奈川県茅ケ崎市は大岡氏の本拠地であることから、両市は昭和５８年、ゆかりの町として提携、交流しています。

3．大給恒・・江戸から明治へ

松平乗謨（後の大給 恒）は幕末から明治にかけて常に時代の先取りをした人物でした。

天保 10 年（1839）、乗謨は三河奥殿藩の第 10 代藩主 松平乗利の長男として麻布の江戸藩邸に生まれました。14 歳で家督を譲られた乗謨は 16 歳で初めて三河国奥殿の地を踏みます。父祖伝来の地に心のふるさとを強く感じたものと思います。領内の産業・文武を奨励し、自ら領内を見回って、道路や用水を開き、植林や養蚕も盛んに奨励したので、領民は名君として若い領主を慕いました。

文久 3 年（1863）、幕府の大番頭から若年寄に出世した乗謨は、藩庁を奥殿から信濃国田野口（長野県佐久市）に移しました。領民たちは藩庁替えに反対しましたが、望んでいた城の建設が奥殿では手狭で不可能だったからというのが最大の理由です。

田野口に移った乗謨はその後、幕府の要職を歴任することになり、若年寄から最後は老中、そして陸軍総裁まで上り詰めました。28 歳という若さでしたが、正に日本の大きな時代の変わり目に、その中心的な存在となったのです。

フランス式の軍学や築城様式を学んでいた乗謨は、田野口に星形要塞の竜岡城（竜岡五稜郭）を築城しました。さらに幕府軍をフランス式に改変、新時代への対応という面では常に一歩先んじた動きを見せました。しかし、薩摩藩

と長州藩が同盟を結び幕府による第二次長州征伐が失敗すると、徳川家の存続を願った第十五代将軍 慶喜は「大政奉還」を行い、内戦の回避を試みます。しかし薩摩の西郷隆盛らの画策によって明治元年（1868）には鳥羽伏見の戦いをきっかけに戊辰戦争が勃発しました。国内の大規模な戦いを避けようと、乗謨は全ての要職を返上、松平姓から大給と改姓し朝廷に恭順の意を示しました。大給を名乗ったことは、先祖が三河出身の大給松平家であるという誇りを示したものでした。

乗謨は後に恒と改名します。明治政府でも元老院議官を始め賞勲局副長官に任用され、日本の勲章の原型を作りました。やがて西郷隆盛による西南戦争が起こると、佐賀藩出身の佐野常民と共に、敵味方を問わない負傷兵の救済を主張、博愛社、後の日本赤十字社を設立しました。

大給 恒（日本赤十字社蔵）

コラム

奥殿藩のあった岡崎市と田野口藩のあった臼田町（長野県佐久市）は、昭和５８年にゆかりの町の提携をしました。

―― おわりに ――

ふるさとは、三河

およそ９００年前、武士が台頭してきたころから、・・。

三河が、日本の歴史の風を起こしてきたように感じます。

その「土（つち）」から、「士（さむらい）」を生み、風が立ち、国が成り、泰平日本を創り出してきました。

その歴史を開きながら、その人を追ってゆくと、日本各地が見えてきます。この町も、あの村も、どこかで誰かの縁が三河と繋がっています。

その三河の藩は９藩、岡崎、西大平（岡崎市）、西尾、挙母（ころも）（豊田市）、刈谷、西端（にしばた）（碧南市）、吉田（豊橋市）、田原、畑村（はたむら）（田原市福江）。廃藩置県（はいはんちけん）直前には、奥殿（岡崎市）、半原（はんばら）（新城市）、重原（しげはら）（知立市）もありました。

三河は一つになって、全国へ「おかえりなさい、ふるさと三河へ」と声をかければ、きっと日本が、世界が一つになります。

幕末、全国の藩はおよそ２８０藩、このうち１２０藩が三河出身の親藩、譜代といい、全藩の４３％を占めています。直参（じきさん）旗本は８４０家、そのうち２９５家、３５％が三河出身といいます。

「三河以来の家柄（いえがら）・・」とは、三河家門の誉（ほま）れ、信頼の証（あか）し。その信頼が、日本を一つにしてきました。

私たちは、歴史に学びます

深く歴史の声に耳を傾け、広く現代のうねりを見つめるという「歴史に学ぶ」姿勢が知恵を生み出すものと思います。日本の歴史の紆余曲折を整理してゆくと、乱世が収まり江戸時代が成り立ち、泰平が整うところに集約されます。

その時、大切な地域が三河。大切なまちが、三河ゆかりのまち。

その中心に徳川家康公がいます。

過去、平成２２年から平成２７年の、家康公薨去四百年に至る六年六回の「家康公検定」と、その翌年、岡崎市制百年、「江戸のふるさと岡崎」を位置付ける「ファイナル家康公検定」が行われました。

さらに検証を深めたく、「新・家康公検定」を構想するとき、原点の地、行政市域を超え「三河」に視座を置いて、日本各地からの「わがふるさとは、三河」の声に耳を傾けてこの事業が始まりました。

それは、混迷する次代への明かりでありたいと思います。

年　表

家康公の生涯

天文 11	1542	1 歳	12 月 26 日、岡崎城にて誕生。幼名 竹千代。 父は松平八代 広忠、母は刈谷城主 水野忠政の娘 於大
天文 13	1544	3 歳	今川方の水野氏が織田方となり、母 於大が離縁される
天文 16	1547	6 歳	今川の人質に向かう途中、田原 戸田氏の裏切りにより 織田の人質となる。
天文 18	1549	8 歳	父 広忠が暗殺される。人質交換で駿府に。今川氏の人質となる。
弘治元	1555	14 歳	元服し、松平元信を名乗る。
弘治 3	1557	16 歳	関口義広の娘（後の築山殿）と結婚。
永禄元	1558	17 歳	初陣で三河寺部城を攻略。元康と改名。
永禄 2	1559	18 歳	長男 信康誕生。
永禄 3	1560	19 歳	桶狭間の合戦で今川義元戦死。菩提寺の大樹寺に入り、登誉上人より 厭離穢土 欣求浄土の言葉を授かる。岡崎城に帰還。
永禄 4	1561	20 歳	織田信長と和睦。三河平定に着手
永禄 5	1562	21 歳	織田信長と清州同盟を結ぶ。
永禄 6	1563	22 歳	家康と改名。三河一向一揆勃発。
永禄 7	1564	23 歳	三河一向一揆を収め、三河を平定。
永禄 8	1565	24 歳	家臣団再編（三備の制）。
永禄 9	1566	25 歳	徳川への復姓を勅許され従五位下 三河守に叙任。徳川家康を名乗る。
永禄 10	1567	26 歳	長男 信康が信長の娘 徳姫と結婚。
永禄 11	1568	27 歳	武田信玄の駿府侵攻に合わせ、遠江侵攻。
元亀元	1570	29 歳	姉川の合戦。織田・徳川軍が浅井・朝倉軍を破る。 岡崎城を信康に譲り浜松城に移る。
元亀 3	1572	31 歳	三方ヶ原の合戦で武田信玄に惨敗。
天正 3	1575	34 歳	長篠の合戦で織田軍とともに武田軍に大勝。
天正 7	1579	38 歳	三男 秀忠誕生。妻 築山殿、長男 信康自害。
天正 9	1581	40 歳	武田方の高天神城奪還、遠江平定。

年　表

家康公の生涯

天正 10	1582	41 歳	武田氏滅亡。駿河を領有し三ヶ国の大名に。本能寺の変。伊賀越えで岡崎に帰還。
天正 12	1584	43 歳	羽柴秀吉と小牧・長久手の合戦。
天正 14	1586	45 歳	豊臣秀吉の妹 朝日姫を娶り、秀吉に臣従。浜松城より駿府城に移る。
天正 17	1589	48 歳	五ヶ国総検地。七ヶ条の定書を発令。
天正 18	1590	49 歳	秀吉と小田原北条氏を攻略。関東移封、江戸城に移る。
文禄元	1592	51 歳	文禄の役（秀吉による朝鮮出兵）。肥前名護屋城に滞陣。
文禄 2	1593	52 歳	江戸にて藤原惺窩から朱子学を受講する。
慶長 3	1598	57 歳	秀吉死去。朝鮮出兵からの即時撤退を命ずる。
慶長 5	1600	59 歳	会津 上杉征伐。伏見城の戦い。関ヶ原の合戦で石田三成ら西軍に勝利。
慶長 6	1601	60 歳	街道整備、伝馬制。伏見に銀座設置、金銀貨幣鋳造。朱印船貿易制度化。
慶長 8	1603	62 歳	征夷大将軍となり江戸に幕府を開く。
慶長 9	1604	63 歳	家光誕生。糸割符制の導入。
慶長 10	1605	64 歳	朝鮮国との国交回復。将軍職を三男 秀忠に譲る。
慶長 12	1607	66 歳	駿府城に移り、平和社会建設に向け大御所政治を始める。
慶長 14	1609	68 歳	通貨の交換基準を定める。オランダ商館を開設。
慶長 15	1610	69 歳	名古屋城の築城。スペインとの通商を始める。
慶長 16	1611	70 歳	スペイン国王使節を駿府城にて謁見。
慶長 17	1612	71 歳	禁教令を発令。
慶長 19	1614	73 歳	方広寺鐘銘事件。大坂冬の陣。
慶長 20	1615	74 歳	大坂夏の陣、豊臣氏滅亡。
元和元	1615	74 歳	元和偃武を宣す。武家諸法度、禁中並公家諸法度の発令。
元和 2	1616	75 歳	太政大臣叙任。4 月 17 日、駿府城にて薨去。久能山に埋葬される。

私たちは「新 家康公検定」を応援しています。

愛知県信用保証協会
アクサ生命保険（株）
いちよし証券（株）岡崎支店
（株）犬塚石材本店
（株）太田商店
太田油脂（株）
（一社）岡崎市観光協会
岡崎信用金庫
岡崎通運（株）
おかしん信用保証（株）
おかしんリース（株）
岡陸タクシー（株）
小原建設株（株）
（有）オプト・ヨシカワヤ
損害保険ジャパン日本興亜（株）岡崎支社
（株）太陽社
大洋荷役（株）
大和証券（株）
（株）竹内文具店
武田機工（株）
（株）ダッド
タニザワフーズ（株）
（株）ツツイエンターテイメント
（株）東海愛知新聞社
東海光学（株）
東邦ガス（株）三河支社
（株）トーエネック岡崎支店
（株）中根組
服部工業（株）
（名）備前屋
フタバ産業（株）
（株）まごころ
（株）みずほ銀行岡崎支店
リコーエレメックス（株）

（協賛事業所名一覧　50 音順）

「新・家康公検定」副読本

「わがふるさとは、三河」

～家康公と家臣団ゆかりの地～

発行日　平成 30 年（2018）8 月 21 日
編　集　おかざき塾
発行者　公益財団法人徳川記念財団
　　岡崎商工会議所

わがふるさとは、三河

試験日 平成30年10月7日日 10:30〜12:30
（試験時間90分）